

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 10 月 20 日現在

機関番号：24402

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25380688

研究課題名(和文) 死の社会学的分析

研究課題名(英文) Sociology of death and dying: Japanese Case

研究代表者

進藤 雄三 (Shindo, Yuzo)

大阪市立大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：00187569

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、「死の社会学」と呼びうる新たな研究分野に関するパイロット・スタディたることを目指している。具体的には、以下の4点を課題として設定した。1)「死の社会学」と総称される包括的分野の全体像、その輪郭を確定すること。2)その構成部分をなす個別研究領域における、代表的・基礎的な文献を系統的に整理すること。3)1)と2)の整理に基づき、その具体的な分析対象として日本社会を取り上げ、近代から現代にいたる死の社会的諸相を描き出すこと。4)「死の社会学」という分野、およびその分析が、近代・現代社会の変容といかなる関係を持ち、いかなる意義を持つのかを社会理論の観点から検討する。

研究成果の概要(英文)：The project aims to be a "pilot study" of so-called "Sociology of death and dying," relatively newly emerging research area in sociology. Four specific tasks are to be pursued: 1) delineating the outline of "sociology of death and dying" through examining the research literature including death studies and thanatology in general, and sociology of death in particular; 2) codifying the representative and basic research literature on the specific subfields that in all compose the "sociology of death and dying."; 3) presenting the sociological analyses of Japanese society, on the specific fields established by 1) and 2) tasks; and lastly 4) exploring and the searching the meaning and significance the field "sociology of death and dying" might have on the understanding of modern, contemporary societies in general, and the Japanese society in particular.

研究分野：医療社会学、社会学理論

キーワード：死の社会学 死別と悲嘆 医療化 自然死・検死 葬送儀礼 自死・自殺 安楽死・尊厳死・水子 エイジング

1. 研究開始当初の背景

死の社会学的分析に関しては、すでに数十年以前から欧米では一定の蓄積がなされてきていたが、日本においてはこの分野の研究は決定的に立ち遅れてきていた。2012年の日本社会学会の機関誌である『社会学評論』において、初めて独立した研究分野として「死の社会学」が取り上げられた。しかし、依然として、それまでの欧米の研究地区生起の全容は紹介すらされていないといえる。本研究は、その欠落を埋めようとするものである。

2. 研究の目的

日本における「死の社会学」的研究提示は、個別分野における少数の代表的な文献の列挙、という形式をとっている。ここに決定的に欠如しているのは、その個別研究が部分として含まれる「死の社会学」の輪郭・範囲・全容に関する情報である。日本社会における「死の社会学」的分析のパイロット・スタディをめざす本研究の目的は、したがって以下の2点に設定される。

(1) 「死の社会学」と呼びうる包括的な分野の全容、その輪郭を提示し、同時にその全体の部分を構成する下位の研究領域における代表的・基礎的な研究を系統的に整序(codify)すること。(2) その基礎の上に、日本社会を対象とした「死の社会学」的分析を提示し、この学問領域ならびにその分析が近代・現代社会にとって持ちうる意味と意義を検討すること。

3. 研究の方法

上述した二つの目的にしたがって、以下の二つの方法を採用した。

(1) まず、「死の社会学」の輪郭を明らかにし、その個別分野における研究の系統的整理という課題に対しては、基本的に文献研究に依拠する。

具体的には、まず、現段階で利用可能な代表的な「死」に関する包括的な研究(とりわけデス・スタディーズ、およびサナトロジー[死学])を輪郭の最遠の臨界点として設定し、相対的に限定された「死の社会学」的研究と対比することを通して、両者の境界と共通点を確定してゆく。次に、複数の百科事典類の語句選択、語句の内容説明を比代表的な較検討することを通して、先の境界画定を再確認するという作業を行う。また、この課題に関しては、『死の予告』(1996=2006)の著者である N.Christakis イェール大学教授からのインタビューを行った。

(2) 次に、日本社会を対象に「死の社会学」的分析を遂行するに際しては、死生観、身体観、検死制度、死刑制度、水子、震災死、自死など、比較文化論的に日本の特徴とされてきた複数の論点を組み入れつつ、欧米と共通の枠組みのなかにそうした研究を配置する。この作業も、基本的に文献資料の検討が中心

となる。

同時に、葬送儀礼、検死制度、自死、さらに社会問題化されつつある孤独死・平穏死等のトピックに関しては、多様なドキュメント類およびインタビューを組み合わせ、内容の記述に反映させるという方法を企図した。

4. 研究成果

(1) 「死の社会学」の輪郭

「死の社会学」の輪郭を描き出すために、まずデス・スタディーズおよびサナトロジーにおける包括的な文献のトピック構成と、死の関する代表的な百科事典の語句選択・内容説明の双方を突き合わせる作業を行った。前者の文献としては、*Handbook of Death and Dying* 2vols(Sage 2003)、後者に関しては *Macmillan Encyclopedia of Death and Dying* 2vols(Macmillan 2002)、*Encyclopedia of Death and Human Experience* 2vols(Sage 2009)、*Encyclopedia of Death and Dying* (Routledge 2001)の3冊を選定した。

上記のハンドブックの構成は以下のようになっている。第1巻 死の存在、(第1部 文化的文脈における死、第2部 社会的文脈における死：道徳性と意味、第3部 死と社会的論争、第4部 死にゆくこと：社会過程としての死)、第2巻 死への反応(第5部 葬送：死の社会的儀礼、第6部 身体処理、第7部 死後のサナトロジカルな問題、第8部 死の法律的側面、第9部 想像力と死への反応、第10部 死の未来)。通常の死の社会学的テキストは、序論的部分として、死亡率の歴史の変遷、社会的分布などのデモグラフィの提示と、死の社会的処遇・意味付けに関する文化的・社会的な多様性の提示を配置している。このハンドブックの構成では、第1部と第2部がその部分に該当している。

内容面としては、第3部の論争の主題の内容として、自死・自殺、死刑制度、中絶、HIV感染、安楽死が取り上げられている点、および死別と悲嘆の社会過程が対象化されている点(第4部、第7部)、葬送儀礼(第5部)死の法律的側面(第8部)などにおいて、標準的なトピック構成を取っていることができる。構成としての特徴としては、「身体処理」(第6部)と芸術における死の主題(第9部)を独利したパーツとして設定している点である。

しかし、このハンドブックの最大のメリットは、その対象領域の包括生だけでなく、社会学的視点を色濃く持った論稿が諸処にちりばめられている点にある。たとえば、第4「死にゆくこと」では、「逸脱としての死にゆくこと」、「全制施設における死：刑務所における死」などの論稿、第5部「葬送儀礼」では8カ国に関する個別の論稿、エンバーミング、葬儀産業、軍隊に関する論稿、第7部「死後のサナトロジカルな問題」では、「悲嘆の社会的次元」悲嘆の社会的相違、子ども、

親の死の含意、等に関する論稿が含まれており、狭義の「死の社会学」的テキストと内容的に重複する部分が見受けられる。

(2) 「死の社会学」：テキスト分析

(1)で扱った上記の書籍を「死の社会学」の外延の臨界として設定し、次に社会学者による狭義の「死の社会学」のテキストを検討することを通して、両者の関係、両者の境界の確定を企図した。対象として選択したテキストは、90年代以前に関しては、K.Charmatz, *The Social Reality of Death: Death in Contemporary America* (Addison Wesley 1980)、および M.C. Kearl, *Endings: A Sociology of Death and Dying* (Oxford University Press 1989) の2冊。90年代以降のものとしては、G.Howarth, *Death and Dying: A Sociological Introduction* (Polity Press 2007) および R.Macmanus, *Death in a Global Age* (Palgrave Macmillan) の2冊である。

この4冊の代表的テキストの構成、およびその内容の記述からは、90年代以前と以後の差異がまず指摘できる。一つは、ゴーラーからアリエスにいたる「死の拒絶」という主題の扱いに対して、90年代における反論（「死のリバイバル」あるいは「死の饒舌」）を受けて、90年代以降のテキストでは社会意識上の変容が起きている、という論点への言及が明示化されている点である。他の一つは、同じく1990年代におけるメディア、IT革命と呼ばれるサイバー空間の論議を、死の社会学に組入れようとする構想が90年代以降のテキストには明示的に現れている点である。最後に、同じく90年代以降のグローバル化と同時生起してきた、テロリズムの問題と関連して、軍事における死、大量死、グローバルな拡散、という主題の提示が見出されるようになった点である。

(1)で扱われた主題と、(2)で扱われている主題とは、かなり重複している側面があるとはいえ、その質的な相違をあえて強調して指摘すれば、以下の3点が指摘しうる。

1. 社会学視点の明示化：「死の社会学」のテキスト著者は、概して特定の社会的観点あるいは社会学理論を基点に、死の社会学の輪郭を描き出している。たとえば Charamatz は「象徴的相互作用論」の視点に依拠することを明示しているし、Howarth は「構造とエージェンシー」に関するブルデュー、ギデンズ、ハバーマスの議論を、テキストの主題構成の枠組みとして採用している。

2. 社会学のテキストは、とりわけ90年代以降に関しては、時代の問題を組み入れようとする志向性が相対的に強く現れている。たとえば、メディア（大衆文化）における死、グローバル化社会における多様な死（テロリズム、大量死、軍事における死など）などのトピックにその志向性は反映している。

3. 最後に「良い死」と「悪い死」への言及

を挙げておきたい。その具体的な指示項目としては、(1)でも(2)でも通常前者に対しては「ホスピス」が挙げられ、後者に対しては「突然死」などが挙げられるのが一般的である。しかし、こうしたトピックを「死の医療化」という近現代社会において生じた現象と結びつけ、「悪い死」の現状判断の反転として設定された「良い死」の理念の創出、ととらえる視点は、現代社会の歴史的位相をとらえる基本的な視点を提供しうる可能性を持つものといえる。

(3) 日本社会における死の位相

日本において「死の社会学」というタイトルを書籍の題名に関した著作は、管見のかぎり2001年に刊行された、副田義也編による『死の社会学』（岩波書店）（副田2001）ただ1冊である。訳書のタイトルとしてもゴーラーの『死と悲しみの社会学』（ヨルダン社）（ゴーラー1989）、単著としてはゴーラーの著作の訳者でもある宇都宮による『生と死の宗教社会学』（宇都宮1989）、本報告の冒頭で挙げた澤井敦による『死と死別の社会学』（青弓社）（澤井2005）、中筋由起子による『死の文化の比較社会学』（梓出版社）（中筋2006）、さらに日本法社会学会編の『死そして生の法社会学』（日本法社会学会2005）「死」と「社会学」を含む数少ない著作の代表例にとどまっている。少なくとも1節・2節で取り上げた「死の社会学」のテキスト内容と対比するならば、日本の社会学界においてそのカウンターパートは存在してこなかったといっても過言ではない。

この点において、(1)(2)において提示された「死の社会学」の標準的なトピック構成に応じた課題を、日本社会を対象・素材として展開される必要がある。以下にその構成の概要、および留意点を列挙する。

死をめぐる、文化的、歴史的変異、および死亡率の変異に関するデモグラフィを序論部分として提示する（遺体観、死生観に関する文化人類学的知見を援用）。

個別の対象領域としては、a) 死の医療化の歴史的プロセスと比較、b) 葬送儀礼の歴史的変容（産業化、自然葬）c) 死と仕事（産業衛生、階層性、死の仕事）d) 死別と悲嘆（メディアにおける表象を含む）e) 戦争と死（大量死、震災死の問題を含む）f) 死の規範（自殺・自死、尊厳死問題を含む）g) エイジングと死（水子、中絶、自然死の問題を含む）などが設定しうる。

相対的に日本社会に特有とされる論点、たとえば水子、過労死、病院化、高齢化の速度、震災死・震災関連死、遺体観・死生観、検死制度、死刑制度、等に関しては、上記の個別項目の箇所において随時展開する。

(3) 「死の社会学」研究の理論的含意

「死」に対する人間の関心は、歴史とともに古い。その関心に主に答える役割を担っ

てきたのは、広義の宗教といえる。しかし、本研究の主題である「死の社会学」という研究分野に関していえば、その歴史的・社会的基盤はかなり明確な限定を付すことが可能である。端的に言って、「死の社会学」の成立自体、近現代社会における広義の「死の医療化」と呼ばれる現象を前提としている。その研究史はゴラーの「死のポルノグラフィイー」(1955)に淵源し、70年代の先端医療革命を契機とした、生命倫理、患者の権利運動、尊厳死(自然死)運動を経て、80年代アリエスの「死の拒絶」あるいは「転倒した死」という文明論的テーゼの世界的流通、という歴史を通して展開されるにいたっている。

この意味において、「死の社会学」の社会学理論的含意を探るに際しては、「死の医療化」と呼ばれる歴史的過程の探索が不可欠の作業として要請される。とりわけ、近代国民国家の成立に伴う「公衆衛生」「社会医学」の誕生、死亡診断書 death certificate の歴史、医師による死亡診断の法的義務づけの過程、さらに 20 世紀以降の歴史では、死因分類(ICD)の策定過程をたどる作業が必要となる。

上述の「死の医療化」現象の基礎的状況の探求とならんで、(2)の 3. で言及した「良い死」「悪い死」の 2 分法が、いかなる歴史的・社会的文脈において、具体的にいかなる内容を持つ者として社会的現象として現れ、それが人々にどのような影響を及ぼしたのかを、詳細に明らかにする作業が必要とされる。この論点は、明確な価値性を含んでいるが、価値命題それ自体を一つの事実として対象化することは可能であるというだけでなく、現代社会の一つの重要な方向性を理解する上で不可欠の作業となると考えられる。特に、この作業において注目すべき点としては、老衰 senility 概念と自然死 natural death 概念の関係の相互変容、という論点が挙げられる。

また日本社会における含意という点に関していえば、エイジングというデモグラフィ上の変容が、死に対する態度にいかなる影響を及ぼしているのか、という点が重要な課題となることが予想される。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

進藤雄三、「死の社会学的研究に向けて」、人文研究、査読有、66 巻、2015、211-222

進藤雄三、「社会問題の医療化の現状と課題」、健康保険、69 巻、22-25

〔学会発表〕(計 5 件)

進藤雄三、「死の医療化」、福祉社会学会第 12 回大会、2014.0629、東洋大学(東京)

Yuzo Shindo, Rethinking

“Medicalization of Death and Dying”: Explication through Examining Japanese Case, X ISA World Congress of Sociology, 2014.0717.Yokohama

進藤雄三、Medicalization and Contested Illness: On reproduction and Death、医療社会学研究会、2015.0411、龍谷大学梅田キャンパス(大阪府大阪市)

進藤雄三、健康行動への社会的アプローチ、健康行動研究会、2015.0917、グランキューブ大阪(大阪府大阪市)

進藤雄三、死をめぐる contestation、医療社会学研究会、2016.0327、生駒アイアイランド(大阪府四条畷市)

〔図書〕(計 1 件)

進藤雄三、ミネルヴァ書房、「健康と医療」『社会学入門』所収、2016

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

進藤 雄三 (Shindo Yuzo)

大阪市立大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号: 00187569

(2) 研究分担者

佐々木洋子 (Sasaki Yoko)

大阪市立大学・大学院文学研究科・UCRC 研究員

研究員

研究者番号: 70647833

(3) 研究協力者

Nicholas A. Christakis

Yale University・Human Nature Lab・

Professor